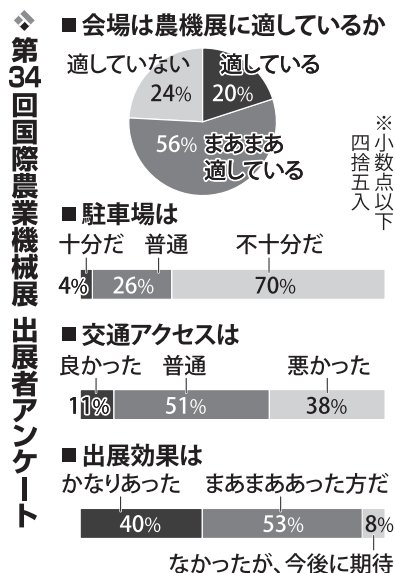


第34回国際農業機械展 in 帯広の開催委員会は、出展社へのアンケート結果をまとめた。出展の効果を実感した企業は9割以上を占めたが、会場の狭さに起因する駐車場の少なさや交通アクセスの問題は今回も指摘され、会場への評価は前回よりもさらに低下した。



全出展社のおよそ半数に当たる69社から回答を得た。出展の効果は「かなりあった」「まあまあ」と答えたのが93%で、2014年の前回開催時を10ポイントほど上回り、96%が今後の継続開催を望んだ。

一方で会場の適性については、24%が「適していない」と回答した。前回は18%で、回数を重ねるにつれて不満が高まっているのがうかがえる。

要因として考えられるのが、駐車場の少なさとアクセスの問題。駐車場については「不十分」との答えが70%あり、前回に続いて高い水準だった。

会場となった北愛国交流広場の内外には十分なスペースがないため、関係者でも乗り入れできる車両台数が限定された。また、出入り口が1カ所のみで、来場者が多かった初日は混雑が目立った。自由記述では「関係者と来場者の入り口は別にして」「バス、タクシー乗り場の工夫で混雑の回避を」などの意見が挙がった。

さらに今回は、開催直前の雨天で搬入する農機が会場のぬかるみにはまるなど準備にも支障が出た。未舗装のスペースの出展者は、自費で鉄板や砂利を敷いて対応し、「状態が良い所と悪い所の差がある」「余計な費用を掛けたブースがかなりある。平等ではない」との声もあった。

開催委員会は「4年後の開催でも同じことが課題になるようでは、国際農機展として恥ずかしい。会場を持つ帯広市と共に排水対策、交通アクセスなど課題に対応したい」としている。

このほか、来場者にもアンケートを実施し、297人から回答を得た。9割以上が道内から来場し、このうち十勝が5割近くを占めた。「(会場と来場者用駐車場をつなぐ)シャトルバスの待ち時間がかなりすぎる」「駐車場を近くに用意してほしい」「駐車場と会場が遠い」などの意見があった。

国際農機展はホクレンと北海道農業機械工業会、十勝農業機械協議会が主催し、4年に1度十勝で開催される。今回は国内外から過去最多の134社が出展した。開催期間は7月12～16日で、20万1000人が来場した。